

Title	帝国主義の概念に就て
Sub Title	
Author	伊藤, 秀一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.2 (1932. 2) ,p.237(43)- 308(114)
JaLC DOI	10.14991/001.19320201-0043
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320201-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

しかしそれがやがて春臺として総合的な述作としての「經濟錄」を著作せしめた所以であらう。私は春臺がわが經濟思想史上占むべき地位はこの點に存すると考へる。

米經濟と貨幣經濟とがそれぞれ如何なる地位を占むべきかを、彼は食貨兩篇に於いて明かにした。而して彼は根本的解決策として米經濟に味方した。しかし鋭敏なる彼は應急策として貨幣經濟への途を、その「經濟錄拾遺」に於いて指摘せざるを得なかつた。このことは彼が一方從來の米經濟中心の經濟論の概括を與へると共に他方新しく進むべき經濟論に時代の子として無意識的に一つの指示を與へたものと見る事が出来る。

帝國主義の概念に就て

伊藤 秀一

ヨセフ・シュムペーター (Joseph Schumpeter) の一九一九年の著作「帝國主義社會學」に於ける考證によれば「内政上の標語としての帝國主義は、一八七二年クリスタル・パレス (Crystal Palace) に於けるヂスレーリ (Disraeli) の演説に於て誕生を見た」と(註一)。

ヂスレーリは一八五〇年代に於ては英國の帝國政策に關して自由主義を信奉し、植民地領域の領有に對して懷疑的見解を有し、これが獨立をすら豫想して居つたのであるが(註二)、二十年の後即ち一八七二年に於ては全然舊説を一擲し、大英帝國結成の必要を力説するに至つた。クリスタル・パレスの演説に於て彼は次の

如く述べて居る。……
四十年前は於ける自由主義の出現以來の英國の歴史を觀察するならば、英帝國の分解を引き起した自由主義の企て程、繼續的な巧妙な努力、且つそれ程大なる方によつて支持され、それ程大なる能力と聰明とを以て行はれた努力は嘗てなかつたといふ事を見出すであらう。吾が遠隔の植民地の行政が、自治政府以外の方法で行はれ得るとは考へられぬ。併し自治政府が一度許容さるゝ場合は、それは帝國結合の大政策 (a great policy of Imperial consolidation) の一部分として讓與さる可きである。それは帝國關稅 (Imperial tariff) によつて伴はれ、委託者としての主權者に歸屬する未領有地の享有に對して、英國國民を保障することによつて伴はる可きであり、且つ植民地を擁護し、而して必要な場合には、母國が植民地自體からの援助を求む可き手段と責任とを明確に規定する所の軍法 (a military code) によつて伴はる可きである。……〔註三〕(圓點は筆者)。

ヂスレーリによつて代表さるゝ右の如き見解は、正に英國の帝國政策上に於ける自由主義より帝國主義への轉機を示す指標である。而して帝國政策に於ける

此の推移は、言ふ迄もなく世界に於ける當時の經濟上政治上の一般的情勢によつて促されたものであつた。抑々英國が自由貿易によつて利益を得たのは、此國が先づ産業革命を成就し、他國に率先して資本主義的發展を成し遂げたがためである。此事によつて英國の産業は世界到る處に其の市場を求め、且つ世界の貿易上に其の覇を唱ふる事が出來た。故に又貿易上の一切の障礙は排除さる可きであつた。併し乍ら産業革命の影響は固より英國のみに局限さる可きではなくて、資本主義的發展は、後進諸國に於ても亦著しき勢を以て成就されつゝあつた。就中、獨逸、佛蘭西、亞米利加合衆國等に於ける第十九世紀末に向つての資本主義的躍進は、其の當然の結果として、國外の市場即ち製造品の販賣市場と原料及び食糧の獲得市場を、そして次第に蓄積されたる資本の投下市場を不斷に求めしめた。而して英國の如き廣大なる海外の領土を有せざる是等の諸國は如何にして是れを得可きであつたか。言ふ迄もなく、それは未だ分割せられざる世界領域の分割によつて、又は植民地の再分割によつて、或ひは弱小國を自己の經濟的勢力範圍に包括することによつて行はる可きであつた。これが前世紀の七八十年代以降、資本主

義的に成長した各國をして、擧つて海外の植民地的領域の獲得に向はしめたる根本的理由であつた。而して列強の激しき競争は、必然的に是等の勢力範圍又は植民地的領域に對する政治的の支配或ひは干涉を伴ひ、且つ經濟障壁を設けることによつて他國の勢力の侵入を防止せんとする資本家の利害は、國家の利權を保護するための軍事的設備を必要ならしめたのである。斯かる情勢の下に於て、英國も亦最早晏如として、自由貿易による國家繁榮の夢を貪り續けることは不可能となつた。彼も亦今や植民地貿易に對する保護と特惠と諸制限とによつて、他國の經濟的勢力の侵入を防止すると共に、更に進んで英國資本主義發展のより、廣汎なる餘地を用意せねばならなかつたのである(註四)。

斯くて前世紀の七八十年代を轉機として、資本主義的先進諸國は擧つて帝國主義政策を採用するに至つたのであり、従つて又ヂスレーリの如きは、一八七四年の總選舉戦に向ひ、是れを以て一の有力なる政治的主張として掲ぐるに至つたのである。併し乍ら當時に於ては未だ「帝國主義」(Imperialism, Imperialismus, Impérialisme)なる語は一般に用ひられることがなかつた。縱令ヂスレーリの演説に於て、帝國

主義は初めて政治上の標語になつたとしても、彼は「Imperialism」といふ語を用ひて居るのではなくて、「a great policy of Imperial Consolidation」といふやうな語によつて、是れを表現して居るに過ぎぬ。バヴロヴィチ(Michel Pavlovitch)に従へば「帝國主義」なる語は二十世紀初頭の最良の百科辭典中にすら見出されない。此用語は、現世紀の初めアングロ・ポリア戦争(一八九九—一九〇二年)の時代に至つて、一般に用ひられ始めたのである。南アフリカの二つの共和國を攻略するための英國の此戦争は、初めて帝國主義戦争として言ひ現はされた。此時から帝國主義といふ語は學問上の市民權を獲得し、「帝國主義者」若しくは「帝國主義者」といふ言葉は、夫々の國家の對外政策の特性を言ひ現はすものとして使用され始めた(註五)。

今日では、帝國主義といふ語は、多くの人々によつて使用され、著述に講演に新聞雑誌に屢々繰返し繰返し使用されて居る。併し乍らそは必ずしも常に同じ意味を以て使用されては居らぬ。そは屢々單なる領土擴張を意味するものと解釋される。又屢々暴力的侵略的の意味を持つものとして非難的の意味を含めて用ひられる。或ひは又一方に於ては、是れを以つて單に政治上軍事上の現象として解

釋するものあるに反し、他方に於ては是れが經濟的意義を重視し、帝國主義を以て資本主義的發展のための不可欠的な政策であると解し、若くは資本主義の高度の發展段階其のものを意味するものと解せられる。斯くて帝國主義なる語の使用は今日に於て猶明確たるを得ないのである。

註一 Joseph Schumpeter: Zur Soziologie der Imperialisten. 1919. S. 8.

註二 拙稿、植民政策と自由主義(三田學會雜誌昭和六年八月號所載九九頁參照)

註三 Disraeli, Speeches (1882), Vol. II, p. 503. Cited by Duncan Hall; The British Commonwealth of Nations, 1920, p. 65. Arthur Page: Imperialism and Democracy. 1913. pp. 21-23.

註四 前掲拙稿 二八—二九頁。

註五 Michel Torgovitch: The Foundations of Imperialist Policy. 1922. p. 30.

二

先づ帝國主義を以て強力支配(Gewaltherrschaft)の觀念と同視する見解に就て見やう。それはバツロヴィッチが帝國主義に關する哲學派の見解と名付けて居る所のものである。セイエール(Ernest Selighe)は「帝國主義の哲學」(La Philosophie de l'impérialisme, Paris, 1903-1907)なる全四卷の著作に於て、人種説の主張者ゴビノー(Gobineau)を初め、ニイチェ(Nietzsche)、ルッソー(Rousseau)、プルードン(Proudhon)、カール・マルクス(K. Marx)等を拉し來つて、是等を以て最も代表的なる帝國主義の知的指導者であり且つ其の鼓吹者であるとして居る。ゴビノーは高等人種たるアーリア族は他の一切の人種を支配す可き運命を有するものとなし、白人種は其の固有の人種的特性と能力とによつて、全世界を指揮し、黄色及び黑色人種的一切を支配す可き權利を有するとなした。(人種帝國主義)。ニイチェは個性を萬物の上に置き、全世界及び周圍の集團に優逸せる個人の權利を確認した。(個人主義的帝國主義)。セイエールはルッソーを目して「市民帝國主義」の代表者と呼ぶ。ルッソーの思想は他の階級に對するブルジョアジエの支配を確立せんとするものだからである。同様にプルードンの思想を「プロレタリア的個人主義的帝國主義」と名付け、マルクスのそれを「プロレタリア的階級帝國主義」と呼ぶ。セイエールは、マルクスの思想を以て、プロレタリア獨裁を説く一の階級的帝國主義の代表的なるものと看做し、是れが目的とする所は、プロレタリアによる他階級の奴隸化であると言ふのである(註六)。

セイエールは帝國主義を以て、人種的又は國民的鬭争に於ける夫々の國民又は人種の優逸的支配、一切の環境に卓絶せる天才的個性の權利、又は一階級が他階級を支配せんとする努力等々と觀じて居る。バヴロヅィチは、佛蘭西の文豪ロマン・ローラン (Romain Rolland) の左の一句を引用して、これこそセイエール等の哲學派の見解を、數語を以て巧みに表現して居るものであると言ふ。ロマン・ローランは其の傑作「ジャン・クリストフ」の最後の章「燃ゆる荊」に於て次の如く記して居る。

「何處へ往つても到る處、帝國主義が勝利を得て居る。羅馬教會の神政帝國主義、金儲的な不思議な王朝の軍事的帝國主義、無禮な婪貪な共和主義者の官僚的帝國主義、革命委員の執政官的の帝國主義などが勝利を博して居た。憐れな自由よ：御身は此の世界に存在して居ない。……實際、今日、撰擇は帝國主義と自由の間に存在して居ないが、或る帝國主義と帝國主義との間に存在して居るのである」(註七)。

是等の見解に従へば、帝國主義は權力支配の觀念以外の何ものでもない。そは凡ゆる生活形態、凡ゆる社會思潮に浸透せる一現象に他ならぬのである。

註 六 セイエールに就ては左の獨逸語譯參照、

Ernst Sellière; Die Philosophie des Imperialismus. von Theodor Schmidt. 1917. Bd. I. Der Graf von Cobineau und der Rassenimperialismus. Bd. II. Apollo oder Dionysos? Kritische Studie über Friedrich Nietzsche und dem imperialistischen Utilitarismus. Bd. III. Der demokratische Imperialismus. Rousseau, Proudhon, Karl Marx. Bd. IV. Die Rommische Krankheit. Fourier-Beylie.

註 七 譯文は、後藤末雄譯「ジャン・クリストフ」に據る。同譯書、第五卷、四五六頁。

三

帝國主義を以て單なる強力支配と同視する叙上の哲學派の見解に同ずるものは、今日甚だ稀である。然るに之に反し、帝國主義を侵略擴張政策一般として觀察する見解は、少なからざる勢力を有して居る。特に帝國主義なる現象を一の歴史的範疇として解釋することを拒む人々は、帝國主義は資本主義社會に特有の現象ではなくて、國外侵略政策の行はれた歴史上の凡ゆる時代凡ゆる社會に於て見出される現象である事を力説せんとして居る。「希臘帝國主義」(“Greek Imperialism”)の著者フアーグソン (W. S. Ferguson) の定義によれば「一國民又は一の專制君主が、一帝國を獲得し且つ是れを維持するための政策が帝國主義である」(註八)。彼はアテネ、スパルタ、アレキサンダー大帝、埃及のトレミ王朝、シリアのセルキュース帝國、

マケドニアのアンティゴナス帝國等々の帝國主義政策に就て語つて居る。

同様にフランク(Tenney Frank)は「羅馬帝國主義」"Roman Imperialism"を論じ、クロマー(Earl of Cromer)は「古代及び近世帝國主義」"Ancient & Modern Imperialism"を比較することによつて、兩者の類似と差異とを指摘せんとして居る。クロマー曰く、「或る意味に於て、帝國主義は世界の如く古いと言ふことが出来やう。最近の研究の示す所によれば、ヒクソス(Hyksos)はユーフラットからナイルに及ぶ一帝國を建設した。埃及の歴史に關する最近の著者の一人——ブレステッド教授——はトトメス三世(Thothmes III)を稱して、世界に於ける最初の大帝國建設者であり、アレキサンダー及びナポレオンの眞の先驅者であるとして居る」と(註九)。

是等史學派の見解によれば、帝國主義は人類發展の凡ゆる時代に存在した。故にマケドニアや、カルタゴや、古代羅馬や、現代アメリカや、又はナポレオンやヒンデンブルグの帝國主義に就て、是等を同列に置いて語ることが出来るのである。

シュムペーターの「帝國主義社會學」に於ける所論は、右の俗流の見解に對して一の社會學的根據を提供せんとしてある。シュムペーターに據ると、元來帝國主義

といふ觀念の中には、自ら一國が他の領域を攻略するといふ事が含まれて居る。然らば此の攻略の基礎となつて居るものは何か。何等か具體的な目的に基いて攻略がなされるのであるか。然らば其の目的は何か。彼は是れに答へて次の如く説明する。歴史上の幾多の事蹟に就て見るに、或る國民又は或る階級は、擴張のための擴張、鬭争のための鬭争、支配のための支配を欲したのであつて、多くの國民は何等かの時期に於て其の例を示して居る。而して此の欲求は、何等か具體的の動機又は目的によつて説明し得ない所のものである。換言せば、是等の欲求に基いてなされた攻略には、何等か具體的の目的はないのであつて、攻略其れ自體が目的である。これは自己目的としての擴張であり、攻略である。然りとせば、縱令それが常に働きかける所の具體的對象又は支持せんがための具體的對象を必要とするとしても、擴張の意義は是等の點に存するものではない。又縱令自己目的としての擴張が其れ自體一の目的(Object)だとしても、斯くの如き擴張は其れ自體の他に何等適當なる目的を有しない譯であるから、是れを無目的(Objectios)と呼ぶのが適切である。其の結果として、斯くの如き擴張攻略は、何等の具體的利益をも説

明するものでなく、従つてそは何等かの具體的利益をも充すものではない。故に此の擴張攻略は、指示し得可き限界を超えて、力の續く限り進展する所の際限なき一の傾向であり、そのモットーは Plus ultra である。右の如き見解からシムペータは帝國主義を次の如く定義して居る。

「帝國主義とは、一國家が指示し得可き限界に止まらず、強力的に擴張せんとする無目的傾向である」と (“Imperialismus ist die objektlose Disposition eines Staats zu gewaltsamer Expansion ohne angebbare Grenze”) (註10)。

然らば、何等明確なる目的なくして行はれる侵略主義といふが如きものは、將して如何なる社會状態の下に存在するか。彼は是れに答へて、斯かる傾向は、國民及び階級が軍國的に構成せられた社會状態の下に於ては、斯かる社會状態の生存上の必要によつて、現はれるものであり、又軍國的構成を脱した社會に於ては、過去に於て斯くの如き状態の下に獲得されたる心理的傾向及び社會的構成の繼續的作用によつて現はれるものである。而して右の傾向は、就中其の社會の支配階級の内政的利害關係によつて促進され、且つ戦争政策によつて、經濟的或ひは社會的に、

利益を受ける階級の人々によつて支持される。是等の事實は、シムペーターによれば「帝國主義の生成 (Werden) と實在 (Sein) を、典型的と信ずる所の歴史的事例に從つて分析し、其の分析の結果として得たる所の、各時代の帝國主義に共通の特徴である。

斯くて、シムペーターにありては、帝國主義は或る特定の社會的發展の時期にのみ限らるゝ現象ではなくて、歴史上の夫々の時代に、又種々なる國民の間に見受けられる現象である。故に、例へば埃及、波斯、アッシリア等の古代國家及びアラビアに於ける人民帝國主義 (Volksimperialismus)、近世君主國家に於ける君主帝國主義 (Fürstenimperialismus) 等々に就て語ることが出来る。故に彼は、是れを諸帝國主義 (Imperialismen) なる複數で稱んで居るのである。而して彼の見解によれば、夫々の帝國主義相互の間に種々の相違があるとしても、上述の本質的特徴に至つては總て共通して居るものであるから、従つて「凡ゆる時代の帝國主義は社會學上、一の現象となつて居るのである」(註11)。

註 八 W. S. Ferguson; Greek Imperialism, 1913, p. 4.

註九 Earl of Cromer; *Ancient & Modern Imperialism*. 1910. p. 4.

註一〇 Schumpeter; a. a. O. S. 5.

註一一 Schumpeter; a. a. O. S. 6. SS. 18 ff. SS. 48-49.

四

姑くシュムペーターの所論を中心として、帝國主義と侵略政策一般との關係に就て考察を加へやう。

國外侵略政策が様々な歴史的時期に於て、且つ多くの國々によつて實行せられた事は眞實である。併し乍ら希臘、羅馬等に於ける侵略政策であつても、近世初期の植民地爭奪戦であつても、更に又第十九世紀末以降の所謂帝國主義的侵略政策であつても、是等の對外的活動が、單に擴張のために擴張せんとする無目的の傾向であつたといふ事は到底信ずる事が出来ない。其等の活動は決して無目的の傾向ではなくして、其の根柢に於て明確なる社會的・經濟的の理由を有し、且つ其の時代の社會的支配階級の利害に基いて遂行せられたといふ事は一點疑ひの餘地を存しない。アテネ共和國とペルシャ王國との諸々の戦は、小亞細亞及び黒海植民地の爲めの戦であり、バルカン半島の南部及び東部を環る海上を掌握するため

の戦であり、貿易の覇權のための戦であつた。貿易の全部的獨占を掌中に把握することによつてアテネは其の富裕を築いた。而してこれがための一切の侵略政策は、其他のギリシャ共和國の場合と同様、全く特定階級の利益即ち自由市民階級の利益のために、換言せば奴隷所有者階級の利益の上に遂行されたのである。羅馬帝國の場合も亦同様であつた。「羅馬の強大と衰亡」"The Greatness and Decline of Rome"の著者、フェレロ (Guglielmo Ferrero) は、羅馬の一切の侵略政策が、其の起源に於ても、根本的特質に於ても、特定の經濟組織の下に於ける現象であつた事を示し、且つ銀行家、地主、商人、金貨、資産家等一切の經濟的優逸階級の利害が、如何に古代羅馬の戰勝的軍隊力を動員したかを記述して居る。農業コムミューンの衰亡、地中海に於ける軍事的覇權の確立、少數者の手に富と權力との集中、奴隷の集積——是等の現象と相並んで、羅馬の強暴なる侵略政策は、愈々其の激しさを加へた。羅馬帝國の侵略政策も亦畢竟特定階級の利害によつて遂行された。それも亦奴隷所有者階級の政策であつた。

第十七、八世紀に於ける激烈なる植民地爭奪戦は、商業資本主義の對外的活動以

外の何物でもなかつた。新興支配階級の専ら追求する所は、商業的利潤であり、貿易の擴張支配であり、従つて植民地の獲得と獨占であつた。縱令國內に於ける産業上の發達が、中世的經營制度を壊滅せしむることによつて工業上の資本主義的躍進を著しからしめたとは言ひ、斯かる工業上の隆盛が専ら商業貿易上の優勢に依存して居つたといふ點に、此時代の根本的特徴があつた。是等の事情こそ、正に各國の政治的、軍事的勢力を動員して、海上權の支配と貿易根據地の獲得に向はしめたのである。而して吾々は同様の見地から、帝國主義的侵略政策の根本的理由を、資本主義的發展其れ自體の中に求めることが出来るのである。

シュムペーターも亦、侵略政策が其時代の支配階級の内政的利害關係によつて促進され、且つ斯かる政策によつて利益を受ける階級によつて常に支持される事を認めて居る。併し是等の階級の經濟的利害が、侵略政策の本來の基礎を成すものである事を否定する。彼に於ては、如何なる時代の侵略政策も、其の根柢に於て社會の經濟的事實と何等關する所なき單なる無目的の軍事的行動に過ぎない。吾々は到底斯かる見解に同ずることは出来ないのである。

更に又シュムペーターによれば、凡そ或る時代の政治的思想なり感情なりは、決して單に其の時代の生産關係の反映でもなければ是れに適應する形態のものでもない。是等は本來繼續型のものであるから、屢々過去の時代の生産關係によつて支配せられて居るのである。従つて彼によると、其の社會の構成なり生産關係なりが、侵略政策を促進し若くは支持するが如きものでない場合でも、其れ以前の社會を支配した精神的傾向なり社會的構成が繼續的に作用する結果として、侵略主義的傾向——即ち彼によると帝國主義的傾向が依然として支持される事があり得るのである。成る程前時代の精神的傾向や社會的構成が、次の時代に對して影響を及ぼすといふことは否定し得ざる事であらう。併しシュムペーターの考へるやうに、是等前時代の殘物が新しき時代に對して支配的の力を持つとか、或いは前社會に支配的であつた生産關係が、最も強力に現社會の政治的活動や精神的傾向に作用するといふことは到底信ずることが出来ぬ。資本主義社會の諸々の社會的活動に於て、支配的の力となつて居るものが、資本主義的關係ではなくて、資本主義以前の關係であるといふ事を、將して何人かよく是れを斷言し得るであら

うか。

而もシムペーターが敢て斯かる社會觀を提供して居るに就ては、明かに別箇の意圖を其の中に包藏して居るからである。其の意圖とは何であるか。帝國主義は資本主義の必然的發展段階であるとするマルクス主義の見解を排し、資本主義の本質は常に反帝國主義的平和主義である事を主張せんとすることは是れである。彼は言ふ、純粹の資本主義世界は帝國主義的感情の發育地たり得ない」と。然らば現在資本主義諸國に於ける帝國主義的傾向は如何なる理由によつて存在するのであるか。曰く、それは前時代の精神的傾向なり社會的構成なりが殘存して、猶これが影響力を持つて居るからである。具體的に言へば、現代の帝國主義的傾向は、絶對的君主國家から受繼いだものであり、而も往時の君主帝國主義が隔世遺傳によつて現在の帝國主義に傳承されて居るのである。然るに資本主義は其の本質上非侵略的傾向のものであるから、資本主義が經濟の中に深く浸透し、且つ經濟を媒介として近代人の精神の中に入り込んで居る所では、到る處に於て反帝國主義的傾向が示されて居る。而して資本主義が最も廣汎に行き亘り且つ其の抵抗

の最も微弱なる所、就中デモクラシーが政治的支配に最も接近せる處に於て、此の反帝國主義的傾向が最も強く表はれて居ると。彼は此の自説を證明せんがために、次の事實に就て夫々説明を加へて居る。(一)資本主義的に形成された社會生活の凡ゆる方面に於て、戦争、軍備擴張等に對する反對現象の存すること、(二)資本主義の優勢なる國では平和主義の黨派が強大なること、(三)資本主義の所産たる産業労働者の間には反帝國主義的傾向が優勢なること、(四)資本主義諸國相互間に戦争回避の手段即ち平和的調停の機關が發達しつゝあること、(五)資本主義經濟の下にあつて前資本主義的要因を含むことの最も少ない亞米利加合衆國に於て、帝國主義的傾向が最も微弱であること。斯くて曰く、資本主義の本質は反帝國主義的である。故に「帝國主義を以て資本主義の必然的段階なりとし、資本主義より帝國主義への發展を言ふのは根本的の誤謬である」と(註一二)。

資本主義的經濟活動の根本動力は自由競争である。而してシムペーターによれば、資本主義社會にありては、産業上の異常なる發達につれて、エネルギーの大部分は經濟的競争に集中されるが故に、戦争攻略の方面に向けられる過剰エネルギー

ギ―は前時代に比べて遙かに少ない。即ち其の大部分は經濟に向けられ、殘部が藝術、科學、其他の社會的鬭争に向けられると(註一三)。而も彼は、此の經濟競争が單なる經濟競争に止まらずして、其の發展の過程に於て、必然的に政治上、軍事上の競争を隨伴せざるを得ないといふ事實を理解せず、若くは強いて此事實を見ざらんとするのは甚だ怪しむ可きこと、言はなくてはならぬ。更に又現在の帝國主義的傾向が隔世遺傳であるなしに拘らず、是れが存在して居るに就ては存在理由があるからである。シムムペーター自身も亦、帝國主義的傾向の存在するのは、常に帝國主義的擴張の利益があるからだといふ事を認めて居る。では此の利益は何であるか。何に基いて居るか。吾々はシムムペーターの見解とは反對に、資本主義的に發達せる國に於て愈々益々帝國主義的傾向の盛んなるを見る。而して帝國主義的活動の益々激化するのは、此の利益の追求の益々激化しつゝある事を反映して居るものであると信ずる。然るに彼は此の眼前の事實を無視し、帝國主義戦争に直面し乍ら、猶且つ帝國主義的傾向は前時代の遺物であつて、次第に消滅し行くものであり、資本主義のイデオロギイは非軍國主義的であり平和主義であること

主張して居るのである。

シムムペーターが反帝國主義的現象として挙げた上記の五項目の如きは、全然事實に反するか又は全く事物の真相を無視したものに過ぎない。例へば戦争回避を目的とする軍縮會議の結果が、如何に制限せられたる範圍内に於て軍備を充實せしめ、且つ制限せられざる方面に於ける軍備の擴張を促しつゝあるかは、今や周知の事に屬する。就中労働者階級の間、反帝國主義的傾向の優勢なる事を以て、資本主義の本質が反帝國主義的である事を立證せんとするが如きは、現在の社會に於ける階級對立の意義に關して全然盲目的な見解であると言はなくてはならぬ。而して又近年に於ける亞米利加合衆國の著しき帝國主義的進展を觀察するものは、シムムペーターの所言とは正反對に、前資本主義時代の遺産を有すること最も少なき國に於て、如何にそれが最も優勢であるかを觀取せざるを得ぬであらう。

斯くてシムムペーターの「帝國主義社會學」は、帝國主義に關して何等明確なる社會科學的概念を與へては居ない。茲で吾々に示されて居ることは、畢竟帝國主義

を侵略政策一般と解し、帝國主義は社會の特定段階に於ける現象ではなくて、歴史の凡ゆる段階に存在したといふかの俗流的見解に過ぎない。

註一二 Schumpeter; a. a. O. SS. 53 ff. S. 56. u. S. 65. u. S. 69.

註一三 Schumpeter; a. a. O. S. 53.

五

國外侵略政策は凡ゆる歴史的段階に於て見受られる現象であるが、而も其等は常に擴張のための單なる無目的の傾向ではなくして、其の根柢に於て明確なる經濟的・社會的の理由を有し、且つ其の社會の支配的階級の利害に基いて遂行されたといふ事は既に是れを指摘した。併し乍ら、此の故に凡ゆる歴史的時期に於ける侵略主義を一括して、是れに帝國主義といふ様な社會科學上の一般的概念を與へる事は許されない。何故かといふに、縱令其等のものが、共に國外領域の侵略といふ外觀をとつて居るとしても、凡そ一國をして對外侵略政策を遂行せしむる社會的・經濟的原因は、凡ゆる歴史的段階を通じて決して同一たるを得ない事は明白であり、従つて社會の各異なれる發展段階に於ける對外侵略政策は、各々相異なれる

經濟的・社會的の事情に準據する所の全然相異なれる社會現象だからである。換言せば、世界の歴史的過程に於て、凡ゆる歴史的生産方法、社會の生産力の發展の凡ゆる段階は、國家領域の擴張に關する其れ自體の法則、則ち對外政策に關するそれ自體の特殊なる形式を有して居るのである(註一四)。

帝國主義が侵略主義を内容とする現象であることは疑ひ得ない。併し帝國主義は侵略主義一般ではない。帝國主義的侵略主義は、第十九世紀末葉に向つて初めて世界史の上に現はれたる現象であり、それは資本主義の高度の發展段階と不可分の關係を有する現象である。故に帝國主義を以て前時代の侵略政策と區別する所の根本的理由を、正に高度の資本主義的發展そのもの、中に求めなくてはならぬのである。

帝國主義が資本主義の發達に隨伴する必然的傾向として生じ來つたといふ見解は、是れを幾多の著作や論文の中に見出すことが出来る。併し乍ら帝國主義の説明に關し、又帝國主義なる概念の規定に關し、是等の論者も亦常に必ずしも一致して居るのではない。吾々は先づウールフ (Leonard Woolf) の「經濟的帝國主義」

“Economic Imperialism”なる一書に就て見やう。

ウールフは本書に於て、第十九世紀の七八十年代以降に於ける歐羅巴列強のアフリカ及びアジアに對する支配政策の動機、目的及び其の結果は何であつたかを指摘せんとして居る。彼によれば、アフリカの分割、印度の征服若くは支那の侵略等の複雑なる諸現象を、單一なる原因に歸せしむることは困難である。併し是等の帝國主義的活動は何等かの信念及び欲求に基くものなりとし、且つ此の信念及び欲求は、道德的、感情的、軍事的及び經濟的の四種に分析し得るものであるとして居る。而して近世歐羅巴列強のアジア及びアフリカに於ける帝國主義的活動は、是等の要因によつて形作られて居るのであるが、而も其の根本的動因は經濟的である。故に近世帝國主義は經濟的帝國主義と呼ばれる可きである。

さてウールフの言ふ道德的動因とは何であるか。そは例へば歐羅巴人によるアジア及びアフリカ人の支配及び其の領土の獲得が、道德的に正當であり且つ必要であるとの思想に基いて居る。蓋し未開劣等民族を文明教化に浴せしむることとは、實に文明諸國民の道德的義務であるといふにある。併しウールフによれば、

征服地若くは領得地の幸福といふやうな道德的觀念が、帝國主義的侵略の根本的動因であつたといふ唯一つの例も指摘することは出来ない。而して「歐羅巴がアフリカ及びアジア人の幸福のために、又は文明や基督教や法律秩序等の恩恵を彼等の間に普及せしむるために、アフリカやアジアを攻略支配したといふ事が最早や論ぜられなかつたとしても、被征服民の幸福といふ事は、一度び得られた征服地から撤退し若くは一度獲得したる支配を放棄することに對する反對論として、常に主張せられたし、又依然として屢々主張せられて居る。」佛蘭西がテュニスに軍を進め、英國が埃及やウガンダに出動することが他愛的動機によるものであるとは今や何人も信じない。併し埃及人やテュニス人の幸福といふ口實が、英國や佛蘭西が是等の領域から撤兵するといふ約束の履行を阻止して居るのである。道德的觀念は決して帝國主義的侵略の動因ではなかつた。併し侵略の場合に於ては、是れが著しく誇張せられ、帝國主義の背後の光輪となつて居るのである(註一五)。

同様に冒險的感情や國民的榮譽心が、近代に於ける帝國主義的擴張の決定的動因となつた事はなかつた。國外領土の獲得は國家威信の反映と看做されはした

が、而も領土獲得の實際政策上に於て、國家的榮譽のために帝國主義的征服をなすと聲明した政治家はなかつたし、又征服は光榮なるが故に正當であるとの信念は、最早や一般人民の承認を得る所ではない。されば帝國主義政治家は、常に帝國主義政策を以て、一國の經濟的利益を擁護し若くは是れを伸長せしめんがために必要であると主張した。併し帝國の光榮といふ感情は、道德的義務の觀念と同様に、一度び獲得したる侵略の結果を擁護するための有力なる力となつた。「此瞬間に於て帝國主義者は、感情的及び道德的の議論と信念が最も有用であることを發見する。若しも帝國が光榮あるものであるならば、帝國主義と愛國心との間には明白なる關係が存する。故に帝國主義若くは帝國に對して一言反對論をなすか、又は何等かの帝國領土の放棄を主張するならば、彼は非愛國者であるとせられる。而して帝國が大であればある程光榮は更に大であり、光榮の一端、領土の一片を減ずることは更に一層非愛國的である。斯くて愛國心と道德心とは帝國主義の動因として、はたなく、帝國に對する議論や反對を抑壓するために結合する」(註一六)。

軍事上又は戰略上の信念及び欲求に就て言へば、其等が擴張の原因となり得る

事は疑ひ得ないが、戰略的必要からの侵略は寧ろ限られたる領域に於て見られるに過ぎない。例へば伊太利や佛蘭西に而して居るアフリカ沿岸地方は右の目的に合するとしても、歐羅巴から遙かに距つたアジアやアフリカの領土を所有することが、歐羅巴諸國の軍事上の安全を保障するものとは言ひ得ないのである。併し一度び帝國主義的領有が行はれると、全事情は茲に一變し、今や母國領域のためにはなくて、植民地的領域のために、軍事的保護が與へられなくてはならぬと主張せられる。換言せば、既に獲得したる領土の軍事的保護を確實ならしめんがために、より多くの領土が獲得されなくてはならぬといふ主張が可能となる。斯くて英國が埃及を保有するのは、埃及が軍事上英國を保護するからではなくて、埃及を保有しなければ印度を保持し得ないからである。故に軍事上の理由は、左程帝國主義の原因とはなり得ないが、益々帝國を擴大せしむるに役立つのである(註一七)。

故に、ウールフに依れば、道德的感情的及び軍事的の動因は、上述の如く帝國主義政策に影響を與ふるものではあるが、是等は決して帝國主義の根本的動因ではな

い。帝國主義の根本的動因は、是れを經濟的の原因に、即ち産業革命以來の資本主義の發展に求めなくてはならぬ。先進諸國に於ける資本主義の發展が、何故に帝國主義を必然的ならしめたかに就ては、彼の説明は決して充分ではない。併し其の重要な二三の點に就て指摘して居る。彼は帝國主義を以て前世紀七八十年代に於て急激に現はれ來つた政治的、經濟的現象と見るが、而も斯かる現象を招來するに至つた事情は、既に久しきに亘つて次第に成熟しつゝあつたと觀察する。其の事情とは、一方に於ては、資本主義諸國に於ける工業化の過程に隨伴する所の、食料及び原料生産領域に對する益々増大する欲求であり、他方に於ては是等の領域との交換に於ける最大利潤の獲得である。彼は近代の資本主義的活動に於ける最も特徴的なる事實を次の如く表現して居る。「國民階級又は個人の經濟的利益を増進せしむるために、用ひられ得可き凡ゆる機關が動員された。就中最も強力なるものは、近世國家の組織的權力であつた。政治は經濟の別名となつた」と(註一八)。彼は更に自由貿易政策より保護政策への變化に就て語り、帝國主義的侵略に對する直接の刺戟が、金融的又は資本的勢力によつて與へられたと論じ、且つ帝

國主義政治家の總てが、其の政策の基礎を經濟的理由に求めて居る事等を指摘して居る。而して曰く、故に、近世帝國主義の動因は經濟的であり、其の根柢を經濟上の信念及び欲求に置いて居る。「經濟的帝國主義は、資本主義の論理的適用であり、國際主義に對するこれが原則に他ならぬ」と(註一九)。

資本主義の發達が經濟的諸關係を國際的ならしめ、世界各領域の經濟的依存關係を愈々濃密ならしめつゝある事を認識すると共に、他方に於いて國家の政治的、經濟的の對立を見るものは、斯かる時期に於ける各國の對外政策が、勢ひ獨特の形態をとるに至る可きことに想到するであらう。帝國主義は屢々、斯かる經濟的發達段階に於ける資本主義諸國の對外政策であると解釋される。ヅァイアレート(Achille Vialate)は次の如く記して居る。「新發明は、距離の障礙を減じ、各國民間相互の依存關係を益々増大する傾向あるに拘らず、即ち經濟生活を國際化する傾向あるにも拘らず、國民的感情は政治的獨立を助勢し、各國民をして獨立的生活のため努力せしめる傾向がある。感情と事實との間の此の矛盾は、過去半世紀の歴史上に於ける支配的な特徴である。そは國民の間に不安といふ危険なる感情を

強め、國民的感情の侵略性を發達せしめ、斯くて經濟的帝國主義を招致した」と(註二〇)。而して是等の論者は、經濟的帝國主義が應て經濟的國際主義即ち國際協調主義によつて置き代えらる可きことを希望し、これによつて帝國主義侵略政策が、實際的平和政策に道を讓る可きことを期待するのである。ウールフの見解も亦此點に於ては同様である。

註一四 Pavlovich; op. cit. p. 29.

註一五 Leonard Woolf; *Economic Imperialism*. 1921. pp. 16-18.

註一六 Woolf; op. cit. pp. 22-23.

註一七 Woolf; op. cit. p. 24.

我國に於て現はれたる帝國主義に關する著作中、最も古きものに幸徳秋水述「廿世紀の怪物、帝國主義」(明治三十四年)がある。併し此書に於ては未だ帝國主義は資本主義的發達の必然的傾向として認識せられず、そは單に領土擴張政策若くは大帝國建設政策であると解せられ、而して其の動因は主として愛國心と軍國主義に求められて居る。此書は、帝國主義的政策が「少數の欲望の爲めに多數の福利を奪ふ」ものであり、野蠻的感情の爲めに科學的進歩を阻礙するものであるといふ正義觀に基いて、帝國主義の弊害を指摘するを主眼として居る。

註一八 Woolf; op. cit. p. 29.

註一九 Woolf; op. cit. p. 35. p. 101.

註二〇 Achille Viallane; *Economic Imperialism and International Relations during the Last Fifty Years*. 1923. pp. 165-166.

レーンシヤは嘗て同様の傾向を全然政治的方面から觀察し、是れを國民帝國主義(National Imperialism)と呼んで居る。Paul S. Reinsch; *World Politics at the End of the Nineteenth Century*. 1903. 參照。

六

帝國主義の決定的動因を専ら近代の資本主義的活動に求め、道德的・感情的・軍事的要因の如きを以て、帝國主義的活動の本來の原因ではなくて、寧ろ經濟的侵略主義に隨伴するものであると見るウールフの見解は至當である。併し乍ら其處では、未だ是等、軍事的活動や、觀念的な要因や、政治的侵略政策が、如何に資本主義經濟其のものと有機的關係を有して居るかを示されて居ない。然るに是等の要因は夫々別箇の存在ではなくて、資本主義的活動のそれぞれの現はれとして、帝國主義的侵略政策に向つて一樣に動員されて居るのである。是等の關係に論及する事

は甚だ興味あることではあるが、茲では是れを差控える。吾々は資本主義的現象としての帝國主義に就て筆を進めねばならぬ。

帝國主義を以て、資本主義の最近の發展段階に於ける現象として認識し、此時代に特徴的なる經濟的、政治的及び社會的本質を明かならしめやうとしたものに、夙にホブソン(J. A. Hobson)の一九〇二年の著作「帝國主義論」がある。そは帝國主義の研究に關する最もすぐれたる古典的著作であり、帝國主義の諸特徴を極めてよく詳細に記述して居る。

彼は一八七〇年を以て帝國主義が意識的な政策の端緒を示した時期と見て居る。是等の時期を轉機として英帝國が如何に巨大なる領域を獲得するに至つたかに就て注目し、特に八十年代の半ばに於て如何にそれが顯著なる勢を呈するに至つたかを指摘して居る。「領土の夥しき増加と、アフリカに於ける廣大なる領域を吾々に割當てた大仕掛な分割方法とは、略々一八八四年に始まると見ることが出来る。十五箇年間に約三百七十五萬平方哩が英國に附加せられた。」此の侵略擴張政策は、又同時期以降に於ける獨逸、佛蘭西、露西亞、亞米利加合衆國等の政策と

なつた。換言せば、近代的な侵略政策は、羅馬・希臘時代に於ける如く單一の帝國の膨脹政策ではなくて、互に相角逐する諸々の帝國による領土分割の競争である。

ホブソンは先づ此點に近代帝國主義の顯著なる特徴を見出して居る(註二一)。

さて然らば是等の侵略膨脹政策を促す所の根本的動因は何であるか。そは植民地的領域に對する商業的價值であるか、若くは國內に於ける過剩人口が其の捌口として領土の擴張を促すのであるか。是等の説は屢々領土擴張の原因として主張せられる所であるが、ホブソンを以て見れば、是等は共に帝國主義的活動の決定的原因ではない。先づ對植民地貿易に就て言へば、版圖の擴張は、英國の植民地及び屬領に對する貿易の價值を少しも増加せしめなかつた。即ち英國の近代帝國主義政策は、外國貿易の決定に何等認め得可き影響も與へなかつた」とホブソンは言ふ(註二二)。又版圖の擴張は、國內の過剩人口を吸収し利用するために必要であるとの議論に對して、彼は英國の人口は事實上過剩でもないし又將來人口過剩を恐れる理由もない、従つて「現在に於ても將來に於ても過剩人口に備へんがための擴張政策の一般的な必要は毫も存しない」と論ずる(註二三)。故に是等の見地からす

れば、帝國主義は英國にとつて餘り重要な價值を持つて居ないかの如くに見える。それにも拘らず莫大な犠牲を拂つて帝國主義的擴張を企てつゝあるのは何故であるか。ホブソンは是れを、近代資本主義的活動に於て最も顯著なる現象の二となつて居る所の資本輸出の傾向即ち對外投資の必要に求める。曰く

「帝國主義に於ける更に遙かに最も重要な經濟的要因は、投資に關聯する勢力である。資本の世界性の増大は現代に於ける最大の經濟的變化である。凡ゆる工業的先進國は、其の資本の大部分を其れ自體の政治的領域外に、即ち外國若くは植民地に投下し、斯くて其の資源より益々多くの所得を引出さんとする傾向を有して居る」と(註二四)。

彼は、海外投資によつて齎される英國々民の所得を算定し、其の結果として(一)海外投資に對する利子として齎される所得は、普通の輸出入貿易の利潤として齎されるものよりも遙かに著しく超過して居ること、(二)英本國の諸外國及び植民地に對する貿易並びに其處から生ずるものと想像される所得が、遅々として増加するに過ぎないのに、對外投資からの所得を表はす輸入價值の割合が、甚だ迅速に増大

しつゝあることを認める。而して投資上の此の莫大なる利益、換言せば、投資によつて是等の莫大なる利益を享受する階級が國家を動かして投資領域の擴張を促して居るのであり、且つ近代政治上の最も重要部門たる近代外交政策は、此の事實に基礎を置くものであると觀察する。曰く「大不列顛の近代外交政策は、主として有利なる投資市場のための鬭争であると言つても過言ではない。大不列顛は年々益々廣汎なる範圍に亘つて、海外からの貢納を以て生活する國家となりつゝある。而して此の貢納を享受する階級は、彼等の私的投資の領域を擴張し、且つ彼等の現在の投資を防衛し改良せんがために、公の政策、公の財力、公の權力を行使せんとする刺戟を益々増大せしめる。これは恐らく近代政治に於ける最も重要な要因である。…而して投資者階級が私的業務の目的のために國家機關を行使する政策は、最近に於ける戦争及び併合の歴史に最も豊富に例證されて居る」(註二五)。

而して此の投資勢力の背後にあつて、事實上經濟的、政治的の支配權力を掌握して居るものは大金融豪族である。小なる投資者と雖も投資者としての利害から言へば、金融的大資本家と本質上何等異なる所がない。併し實際上、小投資者は金

融的大資本家に從屬し、其の手足となつて働いて居るに過ぎない。即ち投資者の兵卒共は、經濟政治何れの方面に於ても、投資によつて利子を取得するよりも、寧ろ金融市場に於ける投機材料として株式や株金を利用する所の大金融業者の手先である。是等の金融的勢力は今や事實上政治的政策を左右する程強大である。「彼等の同意を得ずして、且つ彼等の代理人を通ずることなくしては、巨額の資本を敏速に融通することは全然不可能である。ロスチャイルド家と其の顧客が首を横に振つた場合、歐羅巴國家が大戦を企圖するとか、或ひは巨額の國債が募集されるとか眞面目に考へるものは一人もあるまい。資本の新なる流出を伴ひ、若くは現在の投資價值の大變動を伴ふ一切の大きな政治的行爲は、此の金融王の少數團體 (This little group of financial kings) の承認と實際的援助を受けねばならぬ。斯くてホブソンによれば、金融的大資本家の富、其の活動範圍、其の世界的組織は彼等をして帝國主義政策の主要なる決定者たらしめて居る。勿論領土の擴張に當つては、「愛國心、冒險心、軍事計畫、政治的野心、博愛心」といふやうな非經濟的諸要因が作用するものであるから、帝國主義の原動力が専ら金融的であるとは言はれぬが、最後の

決定は懸つて金融的勢力に存するものである(註二六)。

右の如く、ホブソンの説明によれば、帝國主義的擴張政策は専ら投資の利益に存するものであり、是れによつて利益する階級即ち金融的大資本家は、經濟上の支配的權力を掌握し、國家權力を動かして海外領土侵略の政策を遂行せしめるものであると言ふ。然りとせば、彼等をして海外の投資を強制的に行はしむる經濟的原因は奈邊に存するものであるか。ホブソンによるとそれは資本の過剰蓄積の結果である。彼は、生産諸力の發展が大規模企業の成長を促し、其の下に於て生産物が増加し従つて富が愈々膨脹すること、即ち資本の蓄積の著しく増大すること、其の結果として商品及び資本の餘剰が生ぜざるを得ないことを指摘する。此事によつて資本は有利なる投下市場を海外領域に求めざるを得ないのである。さて、生産及び資本の過剰は、どうして生ずるか。生産力の増大に比して、即ち資本蓄積の増大に比して、一般消費力が是れと共に増加しないからである。「生産力は實際の消費率を遙かに凌駕して居る。」而して「國內に於ける生産力の増加は消費力の増加を凌駕する。」故に「到る處に過剰生産力、投資を求めて居る過剰資本が存する」

のである(註二七)。而してホブソンによると、斯かる現象の生ずるのは、畢竟資本主義の蓄積を増大するが、勞働者に對する配分は著しく制限せられ、從つて社會の消費能力は、生産物の増大にも拘らず増大しない。而して此事は資本の過剰を更に益々大ならしめる。若しも此の誤れる分配から公正なる分配に轉じ、勞働の報酬が公正に行はれ、是等の過剰たる可きものが資本として蓄積されずして、高賃銀其他によつて、社會の消費能力を膨脹する様に振り向けられたならば、生産の増加量は彼等によつて吸収せられ、國內市場は無限に擴張され、資本及び勞働は不斷に其の用途を國內に見出し、從つて海外市場又は海外投資領域を爭奪する必要はなくなり、從つて帝國主義は終熄し、是れに隨伴する一切の弊害は除去せられるであらう。斯くの如き分配の行はれる社會の實現を目指すのが、ホブソンの社會改良主義であり、勞働組合主義であり、社會主義である(註二八)。

ホブソンは、高度の發展段階に於ける資本主義的活動の根本的な諸特徴即ち資本輸出の傾向や金融資本の支配的勢力等を明確に指摘して居る。而して是等の資本主義的傾向が必然的に國外領域の擴張を促し、斯くて同様の欲求によつて動員される諸々の資本主義的列強が世界領域の分割を爭ふといふ點に、帝國主義の本質を見出して居るのである。曰く、新しき帝國主義の古きものと異なる所は、第一に、單一の帝國の膨脹せんとする野心に代つて、政治的擴張と商業的利益とを求むる同様の渴望に動かされて互に競争する數個の帝國の理論と實際とが行はれて居ることであり、第二に商業的利益が金融的又は投資的利益に支配されて居るといふ事である(註二九)。

帝國主義が資本主義的發展の必然的結果として招來せられた現象であることは、正にホブソンの指摘する如くである。資本主義諸國に於て蓄積されたる過剰資本は、其の活動の領域を國外に求め、茲に列強による植民地的領域獲得の闘争を誘導する。實に一國の資本的勢力を掌握せる少數金融資本の支配力は、政治的權力を促して帝國主義政策の強化を遂行せしめざれば止まない。而して又此運動たるや、單に資本主義的活動の一部面ではなくて、近代的发展の下に於ける資本主義的活動其のものなのである。此意味に於て吾々は同時に、帝國主義に關する

ホブソンの見解にも亦全然の同意を表することが出来ない。

例へばホブソンは對植民地貿易の重要性を輕視し、新領土の獲得は決して商業上の利益を著しく増進せしめなかつたと記して居る。併し彼が斯く言ふ場合には、其の論述を當時の英國にのみ限定して居ることを認めなくてはならぬし、且つ資本輸出と帝國主義との關係を強調せんがために、商品の輸出が此場合決定的でないことを力説したものと考へられる。蓋し帝國主義の時代に於ては、商品の輸出に代つて資本の輸出が特徴的な現象となつたといふ事は疑ひ得ざる所だからである。ホブソンは明に他の箇所にて於て過剰生産に就て語り、其のための海外市場の必要に就て述べて居る。例へば次の如く言つて居る。「アメリカ帝國主義は、國內に用途を見出し得ず、従つて商品及び投資のための外國市場を必要とする所の資本主義の急激なる進展による經濟的壓迫の自然的所産である」と(註三〇)。又彼が他の箇所にて於て、商業的利益の追求を以て帝國主義的活動の要因となせる事は既に前出の引用によつて明かであらう。それにも拘らず、商品の輸出や商業的利益等が、資本輸出——ホブソンによれば帝國主義活動の根本的動因——と如何なる有機的關聯を有するかは遂に示されて居らぬ。然るに近代資本的活動としての資本の輸出は、決して單に貸附資本の形でのみ行はれるものでもなければ、又貨幣資本の形態でのみ輸出されるものでもない。それは屢々商品の形態を採つて輸出され、又外國企業への參與若くは是れが直接的經營に向つて移動する。換言せば、資本輸出は、單なる資本の國外移動ではなくて、資本制擴張再生産の一行程であり、資本主義の高度の發達段階に於ける擴張再生産——資本蓄積行程其のものである。此意味に於て、資本輸出従つて又帝國主義的活動は資本主義の必然的傾向なのである。

更にホブソンは、資本主義經濟に於ける生産と消費の不均衡を指摘し、生産の過剰及び資本の過剰を一方に於て益々増大する社會の生産力と、他方に於て資本制的分配關係によつて制限される所の社會の消費能力との矛盾に求めて居るのであるが、而も彼は資本制的分配關係を以て誤れる分配様式なりとし、是れに代ふるに公正なる分配を以てすることによつて、吾々は此の資本主義の矛盾、資本過剰、従つて又帝國主義の諸弊害から免れ得可しとして居る。併し吾人を以て見れば、問

題の根柢は分配の公正、不正にあるのではなくて、資本主義的生産關係其れ自體に内存する。故に資本主義經濟の内在的矛盾が帝國主義を必然的ならしめたものとすれば、資本主義的關係が世界的に擴張される此の行程に於て、是等の矛盾も亦世界的規模に於て擴大されゆくものと見なくてはならぬのである。

斯くてホブソンの「帝國主義論」は猶、多くの批判の餘地を残して居るのであるが、而も二十世紀の初頭、澎湃たる世界の帝國主義的傾向に直面して、よくこれが本質を究明したるものと言はなくてはならぬ。ホブソンは自ら其の研究を以て社會病理學の研究であるとし、疾病の悪性を何等陰蔽することなくして、如實に摘出せんことを企てたのである。吾々は次に眼を社會解剖學の立場から書かれた爾後の著作に轉じて、更に一層帝國主義の概念を明かならしめやうと思ふ。

註二一 J. A. Hobson; Imperialism, a study. 1902. pp. 19-20.

註二二 Hobson; op. cit. p. 35.

註二三 Hobson; op. cit. p. 48.

註二四 Hobson; op. cit. pp. 56-57.

註二五 Hobson; op. cit. pp. 60-61.

註二六 Hobson; op. cit. pp. 63-67.

註二七 Hobson; op. cit. pp. 80-86.

註二八 我國に於ける論策に就て見るに、大西猪之介氏は其著「帝國主義論」(明治四十三年)に於て、帝國主義の動因を(一)人口の増殖と(二)資本の充實に求めて居る。氏はホブソンの見解を排して、内に對しては社會改良主義、外に對しては帝國主義の必要を説いて居る。併し近代資本主義的現象としての帝國主義の認識に就いては到底ホブソンに及ばない。更に氣賀博士は「經濟大辭書」(同文館)中「帝國主義」なる項目に於て、帝國主義の起因を大西氏同様、對内的經濟發展たる(一)人口の増加、及び(二)資本の充實に求められる。博士は帝國主義が資本主義の必然的傾向なる事を指摘し、帝國主義反對論を斥けて、國民生活上の壓迫を除き、將來の安易を得むがためには勢ひ帝國主義によらざるを得ずと斷じて居られる。

註二九 Hobson; op. cit. p. 324.

註三〇 Hobson; op. cit. p. 85.

七

帝國主義の理論的研究は今日では、主としてマルクス主義理論を中心として居る。マルクス主義に立脚する帝國主義理論は、全體的に見れば、マルクスが資本主

義經濟社會の解剖のために爲し遂げた理論の一つの發展である。併し此事は彼等の帝國主義觀や帝國主義の説明が必ずしも一致して居ることを意味しない。吾々は是れを大體次の三つの傾向に分つて觀察し得るかと思ふ。

一、帝國主義を以て資本制蓄積行程の必然的結果として現はれ來つた現象であると解する見解、ローザルクセンブルグ (Rosa Luxemburg)、シテルンベルグ (Fritz Sternberg) 等。

二、帝國主義は高度資本主義の政策であるとする見解、カウツキー (Karl Kautsky)、ヒルファーディング (Rudolf Hilferding)、ブハリン (N. Bucharin)、バツロヅィチ (Michel Pavlovitch) 等。

三、帝國主義は資本主義の高度の發達段階其れ自體を意味するとなす見解、即ちレーニン (N. Lenin) によつて代表される見解。

先づローザルクセンブルグの見解から始めやう。ルクセンブルグが其の「資本蓄積論」に於て問題とする所は、資本主義の發展を基礎づける資本の蓄積行程は、純粹の資本制社會——マルクスに於ては純粹に抽象されたものとしての資本主義

社會——の内部に於て支障なく遂行され得るや否やである。「資本論」第二卷中の擴張再生産即ち資本蓄積の表式的説明は、何人も知る如くこれが可能を前提として居る。然るにルクセンブルグは、マルクスの斯かる表式的説明を以て現實的社會に對して妥當性を有せざるものであると見る。何故かといふに、資本主義的擴張再生産は、其の本質上當初から非資本主義的環境を絶對に必要とするものであり、且つ現實に非資本主義的環境との關聯に於てのみ遂行され來つたものだからである。

抑々資本蓄積に於ける根本條件とは何であるか。それは餘剩價值の蓄積される部分が一度に實現されること、即ち純粹の價值形態たる貨幣に轉化されることである。而して貨幣に轉化されたる右の餘剩價值部分が、再び資本として生産の擴張に投ぜられることによつて、初めて資本の蓄積が行はれる。マルクスの言へる如く「蓄積の第一條件は、資本家が彼の商品を賣却すること、斯くて得たる貨幣の大部分を再び資本に轉化するの行程を成就することである。」「餘剩價值を資本として適用すること、換言せば餘剩價值を資本に再轉化せしめること」これが資

本の蓄積である(註三二)。所でルクセンブルグに據ると、餘剩價値の此の資本化さるゝ部分(即ち蓄積部分)は純粹の資本主義社會其のものゝ内部に於ては決して實現され得ない。換言せば餘剩價値の此部分に相應する生産物の購買者は、決して資本主義社會の内部に求めることは出来ないものであつて、これが購買者は常に非資本主義的社會又は社會層である。即ち餘剩價値の此部分は非資本主義的生產社會層によつてのみ實現され得るのである。同時にルクセンブルグによると、非資本主義領域の存在は、物的關係に於ては生産手段(原料)や生活資料の供給及び勞働力の供給に於て、資本蓄積の不可缺的條件である。斯くて資本の蓄積過程は、其の凡ゆる價值關係及び物的關係に依つて、非資本主義的の生産形態と結び付いて行はれるのであつて、從つて又非資本主義領域は常に資本蓄積行程の歴史的環境を形成して居る。斯くして資本主義の發達に伴ひ、蓄積の必然性に促されて、資本主義的諸關係は世界の凡ゆる領域に侵入し、非資本主義的領域を資本主義的經濟關係の中に捲き込む。換言せば、資本主義社會は、非資本主義的環境と相互作用をなすことによつて益々發展し、且つ其の範圍を擴大するものであり、而も非資本主義

的領域が其の資本主義化によつて絶えず狹隘化する過程に於てのみ、資本蓄積の存續條件が與へられて居る。

乍併一方に於て資本の世界的擴張が益々促進されるに反し、他方に於て是れがための條件たる非資本主義的領域が次第に狹隘化さるゝものとすれば、蓄積のための地域を得んとする資本相互の競争も亦次第に激烈化するに至らざるを得ない。ルクセンブルグによると、此の蓄積條件の殘餘を争ふ所の世界各領域に於ける資本の侵略的闘争の段階が、所謂資本主義の帝國主義段階であり、近代資本主義の發展段階である。故に帝國主義を定義して曰く、帝國主義とは未だ沒收せられざる非資本主義世界環境の殘存部分を獲得せんとする競争に於ける、資本蓄積過程の政治的表現である(註三三)。斯くして帝國主義は、資本の歴史的擴大行程の最後の一節に過ぎないものであり、地球上に於ける非資本主義的環境の最後の殘存部分を獲得せんがための、資本主義諸國の一般的な尖鋭化せる世界競争の時代を意味するものである(註三三)。而してルクセンブルグによれば、斯くして(一)資本主義は其の蓄積の過程に於て、蓄積條件たる非資本主義領域を資本化しつゝ、自らの發

展を行詰らせる要因を作りつゝあるものであり、且つ同時に(二)蓄積の殘餘を争ふ世界的の資本競争の激化は、是れと共に經濟的政治的の危機の連續を齎し、資本主義經濟存續の基礎を危殆に瀕せしめる。資本主義は是等の行程を辿ることによつて二重に其の没落を準備しつゝあるのである。

帝國主義が資本制蓄積の過程、即ち資本主義の發達の必然的結果として現はれ來つた現象であることは疑ひ得ざる所である。乍併、資本制蓄積は、其の蓄積條件として終始一貫非資本主義的領域を要求するものであり、且つ今や残り少なくなつた此の蓄積條件の殘餘を争ふ所の資本主義的活動が帝國主義であるといふルクセンブルグの見解に就ては、批判の餘地が存する。資本の蓄積が歴史的には非資本主義的環境の間に於て行はれたといふこと、且つ資本家的生産の機構が、具體的には極めて多様な様式で、常に非資本主義的環境と結び付いて居るといふ事は明かなる事實ではあるが、是等の事實から直ちに、非資本主義的環境が資本制蓄積の絶對的條件であるとの結論は生じない。吾々は斯かる現實から、純粹の資本主義關係を抽象して、資本制的蓄積の問題を考察することが出来るのである。更に

又資本制蓄積の行程即ち資本制的擴張再生産の行程は、其れ自體内部的矛盾を藏するものであつて、是等の内部的矛盾は、生産の外部的範圍を擴大することに依つて均衡を保たうとする努力を示すものであるとしても、此事はルクセンブルグの考ふる如く、非資本主義的外部領域が當初より常に資本制蓄積の歴史的環境を形成するといふ事を意味するものでもなく、反對に又、恐慌其他の理由によつて資本制蓄積の進行が阻まれ若くは攪亂せられて、初めて外部的領域に對する進出が行はれるといふ事を意味するものでもない。故に吾々は帝國主義を以て蓄積條件の殘存部分を争ふ資本蓄積過程の政治的表現であるとするルクセンブルグの定義に賛同し得ないと同様に、帝國主義を以て、資本蓄積の限界を擴張する手段であり、且つ過剩蓄積から周期的に生ずる恐慌の克服を容易にする手段であると認識して居るに過ぎない所のオート・パウエル (Otto Bauer) の見解(註三四)をも承服することが出来ない。帝國主義は何よりも先づ高度の發達段階に於ける資本主義的活動である。然るに叙上の見解に於ては、資本主義の此の發達段階を特徴付けて居る所の諸々の具體的な活動や政策や、又是等の現象を内容とし本質とする所の、

現在の特殊なる資本主義の發展形態に就ては、何等示さるゝ所がないのである。ルクセンブルグは、偶々「帝國主義時代の典型的な外見的諸現象」として「植民地や勢力範囲のための、即ち歐羅巴資本投下の可能のための資本主義諸國の競争、國際借款制度、軍國主義、高率保護關稅、世界政策上に於ける銀行資本及びカルテル産業の優勢なる役割等」を列記して居る。而して曰く「而も是等の事實の經驗的認識のみを以て満足す可きではない。更に進んで、是等諸關係の經濟的法則性を正確なる方法を以て探究し、帝國主義の歴大にして複雑なる諸現象の眞實の根帯を把握しなくてはならぬ」と。此の言は正に至當である。而もルクセンブルグの把握したる帝國主義の眞實の根帯とは如何なるものであつたか。それは「帝國主義は全體として、それ自體資本蓄積の特殊なる一方法以外の何物でもない」と言ふことであつた。故に「帝國主義の經濟的根據の説明は、就中資本蓄積の諸法則より引出す可きであり且つ此れと調和せしめられなくてはならぬのである」(註三五)。

ブハリンは是れを批評して言ふ。「特殊な、歴史的に一期を劃して居る一時代の持つ諸々の特徴は、ルクセンブルグにあつては、單に資本膨脹に關する一般的考察

——而も理論的に誤つて居る所の——の中に消失し去つて居る」と(註三六)。而して此の批評は特にルクセンブルグの理論を繼承する所のシュテルンベルグの次の説明に最もよく妥當する。シュテルンベルグは、帝國主義と獨占資本主義の成長とは、何等必然的の關係を有するものではないと考へる。曰く「帝國主義を以て、從來國內の非資本主義的地域の資本主義化が決定的であつたに對し、今や非資本主義的領土の資本主義化が特徴的である所の、資本主義的生産方法の時代であると定義するならば、帝國主義は歴史的には全然獨占資本主義と一致しないといふ事は自明の理である」と(註三七(a))。更に他の箇所にて曰く「吾々は、高度資本主義が新しき産業組織即ちカルテル、トラスト等に向つて轉化する點に、帝國主義の決定的特徴を認めることは出來ぬ。」資本主義の此の發達段階に於て、産業の集中が益々促進され、従つてカルテル、トラスト等の獨占形態の形成される事は確かである。「併し、最も有力な帝國主義諸國に於ては、帝國主義的侵略と資本主義の獨占組織への轉化との間に、何等明白なる共通の關係が存在しない。」故に「帝國主義を資本主義の前段階と區別する所のものは、帝國主義が非資本主義的領土の資本主義化を

意味するといふ點にある。同時に資本主義の全史は非資本主義的地域の資本主義化を意味する」と(註三七)。

更に又ルクセンブルグ、シュテレンベルグ等は、専ら非資本主義的領域即ち植民地的領域に對する帝國主義的侵略に就て語つて居る。帝國主義の活動が植民地的領域に最も強壓的に作用することは疑ひなき事實であるが、而も唯それだけに限られるものではない。此點に就ては次節に於て論及しやう。

註三一 Karl Marx; Das Kapital. Bd. I. S. 527. u. S. 542.

註三二 Rosa Luxemburg; Die Akkumulation des Kapitals. Ein Beitrag zur ökonomischen Erklärung des Imperialismus. 1921. (Leipzig). S. 423.

註三三 Rosa Luxemburg; Die Akkumulation des Kapitals oder Was die Epigonen aus der Marxschen Theorie gema-cht haben. Ein Antikritik. 1921 (Leipzig). S. 117.

註三四 Otto Bauer; Die Akkumulation des Kapitals. Die Neue Zeit. 31 Jahrgang I. Bd. Nr. 23/24. S. 874.

註三五 Luxemburg; Ein Antikritik. SS. 21-22.

註三六 N. Bucharin; Der Imperialismus und die Akkumulation des Kapitals. (Marxistische Bibliothek Bd. 9.) S. 108.

註三七 (a) Fritz Sternberg; "Der Imperialismus" und seine Kritiker. 1929. SS. 186-187.

(b) Sternberg; Der Imperialismus. 1926. S. 182. u. S. 269.

八

カウツキは一九一四年「ノイエツァイト」誌上の一論文「帝國主義」に於て、帝國主義は近代資本主義の政策であつて、決して近世資本主義其れ自體と同一視す可きではないと指摘して居る。曰く「帝國主義なる語は、今日では極端に走つて、近代資本主義の一切の現象即ちカルテル、保護關稅、金融支配、並びに植民政策を包括するものとされて居る。此の意味に解すれば、帝國主義は勿論資本主義の生存に必要なく可らざるものである。併し此の認識は、資本主義は資本主義なしでは存続し得ないといふ最も平凡な同義反覆を意味するに過ぎずして、其れ以外の何物をも言つて居ない」と。然らばカウツキは帝國主義を如何に解釋するか。彼は言ふ、「帝國主義とは高度に發展した産業資本主義の一所産である。それは各産業資本主義國が、如何なる民族が居住して居るかを顧慮することなく、常に益々大なる農業地域を征服し併呑せんとする欲求である」(註三八)。

カウツキに依れば、資本主義的生産の發展のためには、常に農業及び工業兩産

業部門間の均衡を保つことが必要である。故に資本主義諸國の工業化的發展につれて、次第に農業地域獲得の要求が強められる。従つて「資本家的工業的發展能力が強大であればある程、工業に對して生活必需品と原料並に工業品の購買者を供給する所の、農業經濟的領域擴張の欲求は愈々強大である。」乍併、カウツキーに従へば、資本主義的工業國が、これと交換關係に立つ農業地域を擴張せんとする不斷の努力は、種々の形式をとり得るのであつて、嘗て自由貿易は是れがための一形式であつた。然るに現代に於ては、自由貿易に代つて帝國主義が其のための形式となつた。何故かといふに、資本の輸出に伴ひ、其の投資地たる農業地域を直接植民地として自國の國家權力の下に把握し、以て他國の競争を排除すると共に、其等の地域に於ける工業の發達を阻止し、これをば自己附屬の農業地域として確保せんと欲するに至つたからである。斯くて帝國主義は、資本主義的工業國が農業地域を擴大せんとする努力の特殊な一形式に過ぎないのである。

カウツキーは其後ヒルファードイングの學說の影響の下に、帝國主義に對する見解を變更して居る。彼は産業資本と金融資本とを對立せしめ、内政上並びに外

交上の政策に於て、兩者の間に大なる相違點のあることを立證せんとして居る。即ち彼によると、産業資本は或る程度迄自由主義的であつて、立憲主義と議會との支持者であり、外交政策に於ては平和主義的であるに、反し、金融資本は其の性質上反動的であり、且つ極めて掠奪的侵略的である。而して帝國主義とは正に金融資本の政策を意味するものに他ならぬと。乍併、彼は依然として帝國主義を以て近代資本主義と同義に見る事を排し、それが近代資本主義の特殊な一政策であるとの見解を固執して居る。「帝國主義が特殊な一の資本主義的政策たることは、恰もこれによつて解消せられたるマンチエスタ主義と同様である。マンチエスタ主義も亦縱令一定の經濟段階に必然的に結合して居たとしても、其の經濟段階自體を意味するものではなかつた(註三九)。

右の如き見解の必然的結果として、カウツキーは更に、帝國主義は資本主義的發展の必然より生じたものではあるが、必ずしも今後の發展に不可缺ではないといふ結論に到達して居る。然らば帝國主義に代はる可き資本主義的傾向は何であるか。カウツキーによればそれは超帝國主義(Ultraimperialismus)である。而して

彼は、此の超帝國主義の基礎を資本主義の世界的發展の過程其のものに求めて居る。即ち資本の國際的聯關の増進は、國民的資本家の集團間に共通の利害を齎し、從つて相互の競争を廢除せしむる傾向を有するものであると觀察する。斯くして資本主義諸國家間の對立は緩和され、世界の分割搾取は彼等の協定によつて平和的に進展する。カウツキの言を以てすれば「國家的金融資本の闘争に代つて、國際的に結合せられた金融資本による共同の世界搾取」の行はるゝ資本主義の新段階が、即ち超帝國主義の段階なのである(註四〇)。斯くてカウツキに從へば、帝國主義の段階は、レーニンの解する如き資本主義の最高段階でもなければ、又決して最後の段階でもない。

カウツキの帝國主義論に就いては、批評の餘地は甚だ多いが、茲では其の詳細に亘つて論及する暇がないので是れを省略し、唯次の一點に就て數言を費したい。カウツキは既述の如く、帝國主義を以て金融資本の政策であるとも言つて居るが、而も帝國主義に關する彼の根本的思想は、工業的資本主義國による農業領域獲得の欲求といふ一點に歸着するのであつて、資本輸出も、超過利潤獲得も、恐慌の回

避も、皆これを重要な一基礎として説明せられて居る。原料及び食糧の獲得市場として、又工業的製品の販路として、世界の農業的植民地領域が、資本主義諸國によつて不斷に求められて居るといふこと、而して此事が帝國主義的活動の重要な動因である事は、蓋し否定し得ざる所であらう。併しそれは帝國主義の活動の全體ではなくて、重要な一面たるに過ぎぬ。「帝國主義を特色づけるものは、常に農業國のみならず、高度に發展した工業地方をも併呑せんとする努力である」。故に獨逸は嘗て佛蘭西から其の最大工業地方を、露西亞から全バルチック沿海地方、全波蘭、及びウクライナを奪取することを目的とし、佛蘭西はアルサス・ロレーン及びザール盆地の獲得を目的とした。吾々はこの露骨なる努力を、世界大戰によつて、又特にブレスト及びヴェルサイユ媾和條約によつて示されたのである。

斯かる觀點からすれば、ヒルファードの帝國主義に關する見解はカウツキに比して遙かに包括的である。ヒルファードは近代資本主義の段階を目して、金融資本による獨占の段階なりとし、金融資本の政策即ち帝國主義であるとして居る。さて彼によれば、金融資本の政策は三箇の目的を追求する。第一

は、出來得る限り大なる經濟領域の獲得であり、第二は保護關稅の障壁により此の經濟領域を外國の競争から隔絶することであり、而して第三には、此事によつて是等の經濟領域を國民的の獨占的企業結合の搾取領域に轉化することである(註四一)。而して此の經濟的擴張侵略政策は、必然的に政治的擴張侵略政策を隨伴せざるを得ない。何故かといふに、是等の領域は資本主義の此の發展段階に於ては、單なる商品市場としてではなくて、又資本の投下市場として求められて居るのであるから、従つて其の性質上、投資に對する國家權力の擁護に待つこと頗る大であり、且つ其等の領域に於ける獨占的利益を確保せんがためには、是れに對する障礙を強壓的に克服せざるを得ない必要に驅られるからである。「茲に於て、他國に利害關係を有する凡ゆる資本家は、國家權力が其の權威によつて、世界最遠の一隅に於ても彼等の利益を保護せんことを呼び求める。即ち商業旗が到る處に樹立され得んがために、戦争旗が到る處に仰ぎ見らる可きことを求める」(註四二)。

斯くて金融資本の求むる所は自由ではなくて支配である。金融資本は其の關稅政策により、金融資本のために内地市場を確保し、且つ外國市場の征服を容易な

らしむる所の強大なる國家を必要とする。それは、其の金融的利益を外國に及ぼし、其の政治的權力を振るつて、弱小諸國に對し有利なる供給條約や通商條約を強制する所の強き國家を要求する。而して又膨脹政策を遂行し、新植民地を自國に合體し得る程強大な一國家を必要とする。嘗て自由主義は國家の權力政策の反對者であつた。自由主義は貴族や官僚階級に對し、國家の權力手段を出來得る限り制限することによつて、彼等の舊き權力に對抗して自己の支配を確立しやうとした。而も今や此の權力政策は、何等の制限もなく金融資本主義の要求する所である(註四三)。

ブハリンも亦ヒルファードイニングと同様、帝國主義を以て金融資本の政策であると規定して居る。「此の政策は金融資本主義的構造の支柱であり、世界を金融資本の支配に服せしめ、資本主義以前の古き生産諸關係に置き代へるに、金融資本主義の生産諸關係を以てするものである」。斯くてブハリンによれば、金融資本主義が最近數十年間にのみ特有な歴史的に限定された時代であると同様に、金融資本主義の政策としての帝國主義も亦特に歴史的なる範疇である。人は屢々帝國主

主義を侵略政策と混同して居るが、凡ゆる侵略政策が帝國主義なのではない。帝國主義は一の侵略政策ではあるが、此の侵略的政策には、如何なる生産諸關係を再生産するかといふ事が表示されて居るのである(註四四)。即ち現代の資本膨脹を以前のそれと區別する所のものは、これが生産關係の新しい歴史的な型を、即ち金融資本主義の諸關係といふ型を擴張再生産するといふ點にある(註四五)。

金融資本の政策即ち帝國主義の追求する根本目的に關して、ブハリンはヒルファ・ディングの上記の定義に全然賛同し、且つ次の如く説明して居る。「經濟的領域の擴張は『國民的』カルテルに農業地域を従つて又原料市場を興へ、且つ其の販路と投資範圍とを増大する。關稅政策は外國の競争者を打ちひしぎ、餘剩價值を獲得し、且つダンピングといふ強大なる鐵槌を振ふことを許容する。而して此の全體系は獨占的組織のために利潤率引上げの助けをなすものである。金融資本の此政策は即ち帝國主義である」と(註四六)。但しブハリンにありては、此問題は直ちに「國家資本主義トラスト」に關する彼の見解と結合して居るといふ事に留意しなくてはならぬ。故に彼にありては、帝國主義は又「國家資本主義トラスト」の政策であ

り、帝國主義的對立は又直ちに「國家資本主義トラスト」の對立を意味する。彼は次の如く記して居る。「資本主義獨占組織の支柱たる金融資本は、勢力範圍の獨占並びに販路、原料市場及び投資領域の併合を斷念し得るものではない。若し或る國家資本主義トラストが一の未領有地を強奪しなければ、他の國家資本主義トラストが是れを強奪するであらう」と(註四七)。

ブハリンは、金融資本の政策は、本質上暴力的方法を前提とすると述べて居る。蓋し國家領域の擴張は當然戰爭を意味するからである。故に彼も亦、金融資本は必然的に強大なる國家的、軍事的勢力を必要とするといふ見解に一致して居る。曰く「是等の集團(國家資本主義トラスト……筆者)は、國家組織就中其の陸海軍の強大と勢力の中に最後の發言權を見出して居る。一の強力なる軍事的、國家的權力、これが列強相互間の鬭争に於ける最後の切り札である。斯くて、世界市場に於ける鬭争能力は、『國民』の力と其の結束に、其の軍事上及び金融上の手段に依存して居る。其の強大なる勢力を世界支配に迄無限に擴大する所の國家的、國民的、經濟的、自足の統一體—これが金融資本の作り上げた理想である」と(註四八)。

ブハリン及びヒルファーディングの叙上の見解に對し、バヴロヴィチは、金融資本必ずしも侵略主義的ではないと觀じ、寧ろ問題とする所は、近代資本主義に於て決定的な支配的勢力となつて居るものは、どの産業資本若くはどの金融資本であるかといふ事ではなければならぬと論じて居る。彼は工業を二大範疇に分ち、其の代表的なる形態として、マンチエスターの紡績工業とバーミンガムの冶金工業を對立せしめ、前者は概ね平和主義的であるに反し、後者は著しく侵略主義的であるとし、資本主義經濟の重心が綿絲工業から冶金工業に移つた瞬間から、一の新時代即ち植民地熱の時代、高壓的侵略政策の時代が始まつたと觀測する。斯くて彼は「近代國家の國內經濟及び對外政策に於ける冶金工業の優勢なる支配的役割を強調し、帝國主義の本質を次の如く表現して居る。『帝國主義とは、先づ第一に冶金工業の利害によつて導かれる所の、侵略政策の近代的形態である。此の冶金工業は今や凡ゆる産業的一等國の經濟生活に於て、最も重要な指導的産業の役目を演じて居る。それは言はゞ、中心産業星であつて、最大國家の資本主義經濟に於ける他の最も重要な諸部門は、恰も遊星が太陽の周圍を繞つて居る様に、此の中心産業

星の周圍を回轉して居るのである』と。而して冶金工業の強大なる勢力は、其の工業の産物たる所謂軍需工業との關係、現代の軍國主義及び海軍主義の組織との關係、從つて又クルップ、シュナイダー、アームストロング、グライカース等々の凡ゆる巨大なる兵器工場の背後にある所の軍閥、銀行團、産業トラスト及びシンヂケートとの關係に依るものである(註四九)。斯くてバヴロヴィチは、帝國主義を以て冶金工業の政策に歸着せしめ、且つ其れが必然的に軍國主義的である事を指示せんとして居る。

バヴロヴィチの右の説明は確かに帝國主義の重要な一面を指摘して居る。重工業は疑ひもなく帝國主義の生命を制する基礎的な産業である。併しそれだけでは未だ資本主義の近代的現象としての帝國主義の本質は説明せられない。蓋し帝國主義を必然的ならしむるものは、重工業ではなくて、資本主義の近代的發展それ自體であると言はなくてはならぬからである。

以上に於て、帝國主義を以て高度資本主義の政策なりと認識するマルクス主義的な諸説を概觀した。彼等は一様に、資本主義の近代的發展段階に特有なる現象

としての帝國主義に就て、即ち一の歴史的範疇としての帝國主義に就て語つて居る。而も彼等は、既述せる如く、帝國主義なる概念の構成に於て、或ひは又帝國主義の歴史的地位の認識に於て、必ずしも一致する所がない。例へば、ブハリン及びヒルフ・ディングの如きは、共に、帝國主義を以て金融資本の政策なりと定義し、是れが強壓的擴張政策を、近代資本主義の本質に基く必然的傾向なりとして、共に極めて明快に分析して居るのであるが、而もブハリンが帝國主義的段階を資本主義の最高段階と考へ「金融資本は帝國主義的政策以外の如何なる政策をも樹て得ない」事を強調するに反し、ヒルフ・ディングは、戦後に於ける資本の國際的協定の傾向を認識することによつて、カウツキーと同様の超帝國主義理論に導かれ、従つて其の初期に於ける革命の見解を著しく緩和せしめるに至つたのである。併し是等の點に就ては、他日稿を改めて論述しやうと思ふ。

註三八 Karl Kautsky; Der Imperialismus. Die Neue Zeit. 32 Jahrgang. 2. Band. SS. 908-909.

註三九 Kautsky; Zwei Schriften zum Umlernen. Die Neue Zeit. 33. Jahrgang. 2. Band. S. 111.

註四〇 Kautsky; a. a. O. S. 144. 並び Kautsky; Der imperialistische Krieg. Die Neue Zeit. 35. Jahrgang. 1. Band. SS. 449 ff. 參照。

註四一 Rudolf Hilferding; Das Finanzkapital. 1927. S. 412. 林要譯「金融資本論」六一九頁。

註四二 Hilferding; a. a. O. SS. 405-406. 邦譯六一九—六二〇頁。

註四三 Hilferding a. a. O. S. 426. 邦譯六五〇頁。

註四四 N. Bucharin; Imperialismus und Weltwirtschaft. (Marxistische Bibliothek. Bd. 12). SS. 126-127.

註四五 Bucharin; Der Imperialismus und die Akkumulation des Kapitals. S. 113.

註四六 Bucharin; Imperialismus und Weltwirtschaft. S. 117.

註四七 Bucharin; a. a. O. S. 157.

註四八 Bucharin; a. a. O. S. 119.

註四九 Pavlovitch; The Foundations. p. 120. & pp. 126-127.

九

最後に、吾々は、帝國主義なる語を更により廣義に解釋し、資本主義の高度の發展段階其のものを意味するとなしたレーニンの見解に言及しなくてはならぬ。帝國主義に關するレーニンの規定は今日では最もポプュラーである。彼は次の如く言つて居る。

「帝國主義は資本主義一般の根本的特徴の、一層の發展及び直接の繼續として生じた。併し資本主義が資本主義的帝國主義となつたのは、漸く或る一定の極めて高度の發展段階に於て、資本主義の二三の根本的特徴が其の反對物に轉化し始め、

そして資本主義からより高度の社會的經濟的秩序への過渡的の諸形態が作り出され、且つ出現した時のことである。(註五〇)。斯くて彼は帝國主義を前期資本主義の繼續的現象として理解すると共に、より高き發展段階として解釋し、此の發展を段階の本質と機能とを明かにすることによつて、又同時に資本主義崩壞の必然性此の發展しつゝある資本主義の最高段階即ち帝國主義其のものゝ機構の中に求めて居る。

レーニンによれば、高度の資本主義的發展段階に於ける根本的特徴は、先づ此の發展段階が獨占資本主義の段階であるといふ事である。故に帝國主義とは、一言にして言へば「資本主義の獨占的段階である」。彼は是れを分析し、獨占資本主義即ち帝國主義の最も顯著なる特徴として五つの項目を擧げて居る。

一、經濟生活にとり、決定的役割を演ずる獨占を生み出す程に高度の發展段階に到達せる生産及び資本の集中。

二、銀行資本の産業資本との融合及び此の金融資本を土臺とせる金融寡頭支配の發生。

三、商品輸出とは別箇な資本輸出が特に重要な意義を有すること。

四、世界を自分等の間で分配する所の國際的な獨占的資本家團體の形成。

五、資本主義列強間に地球の領土的分割が完了すること。

是等を總括して言へば、帝國主義とは獨占と金融資本との支配が成立し、資本の輸出が顯著な意義を持ち、國際的トラストに據る世界の分割が始まり、且つ最大の資本主義諸國の間に於ける地球の全領土の分割が完了して居る所の、斯かる發展段階に於ける資本主義である(註五一)。而して彼によると、此の帝國主義の段階は又直ちに資本主義の最高段階であり且つ最後の段階である。蓋し世界資本主義の此の發展段階に於ては、資本主義に内在する幾多の矛盾も亦世界的規模に於て擴大し、是等の矛盾の擴大と尖鋭化とは、必然的に資本主義の全面的崩壞を招來せざるを得ないからである。

斯くてレーニンに於ては、帝國主義の概念は單に金融資本主義若くは獨占資本主義の政策を内容とするものではなくして、此の高度の發展段階に於ける資本主義其れ自體を内容として居る。即ち帝國主義は、單に、金融資本の政策でもなく、治

金工業の政策でもなく、農業的地域獲得のための欲求でもなく、又植民地に對する侵略政策でもなく、凡ゆる是等の諸現象を包括する所の、現代の資本主義的發展段階であると解せられる。斯かる見解から彼は、帝國主義の最も重要な諸特徴として掲ぐる所の前記の諸現象を、其の發展的過程に於て把握し且つ其の相互的關係に於て展開せしめたのである。レーニンの帝國主義論を上記の諸々の見解と對峙せしめ乍ら、より深く帝國主義の本質を究明する事は、これも亦今後の研究に譲らなくてはならぬ。茲では一應此の平面的な記述を以て満足しなくてはならぬ。

註五〇 N. Lenin; Der Imperialismus als Höchstes Stadium des Kapitalismus. (Marxistische Bibliothek. Bd. I.)

Dritte durchgesehene, ergänzte und berichtigte Auflage. S. 99.

註五一 N. Lenin; a. a. O. SS. 100-101.

十

以上に於て、余は帝國主義に關する諸々の見解に就て、隨所に簡単な批評を加ひ乍らこれを表示し來つた。而して其の意圖する所は、帝國主義が近代資本主義の發展段階に特有なる現象であり、且つこれが必然的傾向であることを理解せんと

するにあつた。帝國主義を以て侵略政策と同視する俗流の見解は今日猶全く跡を絶つては居らぬ。其等の或るものは、帝國主義を以つて強國が弱小國若くは弱小民族に加へる強壓的暴力的の政策であるとし、か解せず、其の根本的動因たる經濟的必然性を見ずして、恰も倫理的のみ批判さる可き單なる國家的活動であるかの如く考へて居る。斯く解するが故に、或ひは弱小國に對する帝國主義政策は國際協調の政策によつて代へらる可きであると論ぜられたり、或ひはツールフの指摘した様な帝國主義の道德的若くは感情的原因が強いて求められるのである。

最近「社會學辭典」に於けるズルツバッハ(W. Sulzbach)の見解の如きも、亦其の好適例である。彼は帝國主義に關するシュムペーターの見解に賛し、帝國主義とは一國家が其の支配領域を保護し若くは擴張する所の傾向である」と定義し、且つ現在の帝國主義を君主帝國主義に對して、國民帝國主義と呼んで居る。彼によれば、前者は一個人若くは少數者の權力と支配に基く帝國主義であり、後者は多數者の利益を基礎とするデモクラシーの時代の帝國主義である。而して更に彼は、帝國主義の心理的基礎なるものを列記し、其中に權力意志、鬭争の歡喜、勇氣に對する尊敬、

國民の榮譽等を包含せしめて居る(註五二)。又シュパン(O. Spann)の如きは、帝國主義といふ語は、歴史的に其の意味を變化した一つの言葉であつて、これに對しては未だ明確なる一の社會科學的概念は與へられて居ないし、且つそれは不可能であると述べて居る。何故かといふに、此の概念は、何等統一ある對象を有して居ないのであつて、其中には唯次の如き特徴が多少強く組合はされて居るに過ぎないからである。而してシュパンが帝國主義の概念の中に織込まれて居る特徴として擧げて居るものは(一)權力によつて指揮される專制的支配(Imperator)の概念(二)帝國(Empire)の概念(三)一般に暴力支配(Terror)の概念(四)經濟的國民的又は政治的の權力政策及び擴張政策一般(Imperium)の概念(五)Imperiumが資本主義的現象であるといふマルクス主義的觀念、等である(註五三)。吾々は帝國主義の理解に關して、是等の見解から何もかも學ぶことは出來ぬのである。

是れに反し、同じく社會學者の間にあつても、ハインリッヒ・シュネー(Heinrich Schnee)の如きは、帝國主義を侵略擴張政策一般と混同することを戒め、羅馬帝國の擴張政策が現代の帝國主義と本質的に區別さるゝ、所以は、其等は各々、全然相異なる所の

經濟的・社會的發展形態の下に於ける相異なる現象なるが故であるといふ事を正當に指摘して居る。彼は近代に於ける經濟的構造及び人間の諸關係の變革が、擴張政策の本質を一變した事を指摘し、資本主義的發展の種々相、即ち原料市場獲得戰の激化や資本輸出の必要が、帝國主義的努力を必然的ならしめたと觀察し、且つ經濟的利害の及ぶ所に政治的干渉が伴はれるといふ事を述べて居る。彼は又、近代資本主義的發展を特徴付ける所の獨占や資本集中や金融資本を觀察し、是等のものが帝國主義的活動と密接に結合せる事を承認する。併し乍ら、是等の資本主義的活動を帝國主義と同視す可きではないと言ふ。何故かといふに、彼に於ては、帝國主義は單なる經濟の範圍以上に出で、居る所の擴張の努力を意味するからである。曰く「經濟的事實に關聯する部分の帝國主義的努力を包括して經濟的帝國主義といふのは正しい。例へば原料の獨占の努力の如きがこれに屬する。併し、經濟的帝國主義は帝國主義の一部に過ぎない。蓋し帝國主義は單に經濟的のみならず、特に政治權力的のものだからである」と(註五四)。併し乍ら政治的や軍事的の活動から切離して、單に經濟的事實にのみ關聯する帝國主義的努力といふ概

念即ちシ・ネーの所謂經濟的帝國主義の概念は如何にして可能であらうか。又經濟的の理由から離れて、純然たる政治的の擴張や侵略を言ふのは全然無意義ではなからうか。是れに反して吾々は、是等の活動や努力の統一されたる現象としての帝國主義に就てのみ語ることが出来るのである。其等のものは決して夫々別箇の運動ではなくて、其れ自體、近代資本主義的活動の不可的構成部分なのである。

註五二 Walter Sulzbach; Imperialismus. Handwörterbuch der Soziologie. herausgegeben von Vierkandt. 1931. SS. 253 ff.

註五三 Othmar Spann; Imperialismus: Handwörterbuch der Staatswissenschaften. 5. Band. SS. 383 ff.

註五四 Heinrich Schnee; Nationalismus und Imperialismus. 1928. SS. 34 ff. u. SS. 45-46.

附記 本稿は最初の腹案通りに筆を進めたのでは、豫定の枚数を遙かに超過することに氣付いたので、最も主力を注ぐ可き管のマルクス主義の帝國主義觀に就ては極度に筆を控え、僅かに其の輪廓を示すだけに止め、且つ同時に結論に相當す可き部分をも省略した。故にこれだけでは甚だ不本意なものではあるが、後日の研究によつて、順次其等不備の點を補足してゆきたいと思ふ。猶、同じ理由で註釋の大部分も削除した事を附記して置く。一九三二——一一——二七

觀念論に於ける現實性認識への端緒

——(理論經濟學方法論叙説)——

奥田 忠雄

序 言

本論文は拙稿「理論經濟學の對象」(三田學會雜誌「昭和六年三月號」)及び「理論經濟學方法論叙説」(同雜同年八月號)の續稿をなす。

經驗科學——理論經濟學もこれに屬す——は、その成立と發展の歴史的順序より見るならば、先づ最初には或る認識方法を無批判的に受入れ、これを暗黙の内に前提しつゝ、一定の發展段階に於ける經驗科學を打立てるが、この經驗科學の發展が或る程度に達するや、各種の經驗科學によつて與へられた認識方法を材料として、これを批判し、認識方法一般を吟味せんとする哲學的要求が起る。この哲學による認識方法の意識的批判によつて、經驗科學は更に高き發展段階に達す。然し既に到達された認識方法を以つてしては説明し得ざる現象に直面する場合、各經驗科學者は夫々自己の特定の研究領域に於て、無批判的に或は暗黙の内に新たな認識方法を採用しつゝ、新たな現象を説明